法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

# 意味生成を可能とする普遍原理としての間テクスト性 ： 意味伝達の障壁を克服する間テクスト性の働き

熊田，泰章

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化．論文編 / 異文化．論文編
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
93
(終了ページ / End Page)
109
(発行年 / Year)
2007-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004522

Hosei University Repository

# 意味生成を可能とする普遍原理としての間テクスト性

## ——意味伝達の障壁を克服する間テクスト性の働き——

Intertextuality as the General Principle for Meaningbuild

熊田泰章
Yoshinori Kumata

## 1．序

この論文は、テクストにおける意味の成立と、テクストによる意味の伝達が可能となるための基本原理として、「間テクスト性Intertextuality」に注目し、間テクスト性が発動する仕組みとその有効性の範囲について論じるものである。間テクスト性は、すでに広く用いられる概念となっているが、それでもなお、テクストの意味生成のメカニズムを支えるその根本的重要度についての認識が未だに十分ではないことに鑑み、この小論において、その重要性の深みを示す論考を施したい。

論を始めるにあたり、最初に言及しておきたいのは、テクストを意味素としてとらえるがゆえの間テクスト性の重要性である。意味を生起する記号最小単位は、言語記号によるテクストの場合で、文として最小であるところの一語一文の文形式による意味付与と意味伝達の例を考えれば、語レベルで成立するように思われるのであるが、そのような一語一文の文形式による意味生成が、すでに遂行されたより大規

Hosei University Repository

模のテクスト交換の記憶に依拠するものであることは明らかであり、すなわち、語レベルでのシニフィアン・シニフィエの成立が、語単位での差異と対立によるだけでなく、その語の用いられるテクストが語とテクストとの循環的意味決定によって意味を獲得することと同時的に達成されるのであるから、意味素として機能するのは、語であると同時にテクストであると言える。すなわち、テクストとは語と文の集積をさすだけでなく、意味付与と意味伝達の単位ユニットをなすものであり、集積としてのテクストに間テクスト性の発動を見るだけでなく、単位ユニットの成立からすでにここで発動しているのが間テクスト性であるのだ。

ある一つのテクストがそれ自体でのみそこにあるだけではその一つのテクストの意味は存在しない。テクストは使用されることでその使用における使用者（発話者と受話者の双方）にとって有意な意味を獲得する。しかも、使用者によって認識されるべき所与のテクスト固有の意味が存在するのでは元よりなく、その使用におけるテクストの意味が常に暫定的に成立し、テクストが他のテクストと相互関係を結ぶ時に、それぞれの暫定的意味が相互に一段ずつ階層を上げた暫定的意味に成長して行くことが、テクスト交換において普段に進行し、テクストの意味が、そのテクストを編み上げる個々の記号が常にそうであるように、相互の関係性の中で仮の決定を続けて行くことは、まさに、記号作用の過程が、テクストを構築するそのどのレベルの記号においても作動しているのであり、すなわち記号単位としてのテクストにおいてもあてはまることである[注1]。

この後の論考では、言語テクストに限らず、他の形態のテクストにも着目しつつ、テクストとは意味表象の現象としてそもそもいかなる現象であるのかについて検証していくと共に、テクストの表象形態を超えて機能し、また同一形態であっても合い異なるジャンルを超えて機能する間テクスト性の働きについて検証することで、間テクスト性

Hosei University Repository

の重要度を明らかにする。

## 2．超表象形態・間テクスト性
### ——文化内表象の形態内相互的間テクスト性——

まず、言語テクスト、とりわけ文字テクストによる間テクスト性について考えておきたい。文字テクストにおけるジャンルの具体例として、従来個々の作品と個々の作者に与えられた特権性と独立性がそれを巡る言説を支配してきた、「文学」というジャンルを取り上げて、論証を始めることにしたい。

文学作品を読むこと、それは、作者が間テクスト性を発動させつつ編んだテクストを、読者が自らの間テクスト性を発動させて読むことである。作者が、自ら発動させる間テクスト性によって、新たなテクストとして編み上げたそのテクストは、作者の参照するテクスト全体性の中での差異と対立を有する記号となるが、作者が参照するテクスト全体性が、読者の参照するテクスト全体性とは決して一致しないのは当然である。受容美学によって主張された、開かれたテクストが読者の独自の読書行為を可能とするということは、真実の一部でしかない。すなわち、受容美学によると、テクストが開いているからこそ、読者がその開いている箇所について独自の読解を施すことが可能となり、一つの開かれた箇所に対して独自の読解が施されたことにより、それ以降のテクストの次の開かれた箇所の独自の読解がもはや、そこまでの読解の独自さによってその独自性を決定付けられており、それは、一人の読者のある一回限りの独自な読解を生み出すのみとなる(注2)。ここまでは正しい。しかし、テクストが開かれているのはなぜなのか。テクストが開かれている、とは誰に対してなのか。作者がテクストを編み上げる時に、開かれた箇所を残したまま編み続けるということは

Hosei University Repository

ありえない。編み続けられ、編み上げられるためには、テクストのすべての箇所の網目が編まれていかなければ、編み物としてのテクストが成立しない。テクストは、網目のマトリクスがすべてそろわなければテクストにはならず、ただ、一つ一つの網目の断片が編み物机の上に散乱するだけになる。すなわち、開かれたテクストという概念を、テクストの網目の欠落ととらえてはならないのである。そこにテクストが編まれてあるということは、テクストが編み物として完成していることに実は他ならない。すなわち、テクストの編み手である作者が、作者の発動したテクスト全体性との参照によって、そのテクストを編む行為が一つの記号として有意な差異と対立をもたらすテクストを生産したと判断した時に、その編む行為は完結し、完全なテクストが編まれてあることになる。しかし、そのテクストを編まれたがゆえにそこに存するテクストとして受容する読者は、そのテクストを、己がテクスト全体性との参照に付すことで、己が記号体系の中の記号としてそのテクストの有意な差異と対立を生産するのであり、テクストが開かれているということは、そのテクストが、読者による、その都度新たな営みとして行われる間テクスト性の発動に対して開かれているということなのである。開かれたテクストというのは、テクストの編み手としての作者の手わざの巧拙によって、編み目が欠落したり、飛んだりすることを指すのではないのである。つまり、テクストが開かれているということは、“そのテクストを最初の編み手として手にした作者が、そのテクスト全体性との参照によってそのテクストの意味の発生を行うことで、そのテクストの担う意味のすべてが決定されて、それ以降、そのテクストが別の手に渡っても新たな意味の発生のプロセスがもはや発動しなくなってしまう、すなわち、テクストの意味発動プロセスが完了し、閉じてしまう、テクストがしたがって閉じている、開いていない”ということではないことを言うのである。テクストは、確かに言葉を編み目に編み込んでいくその手作業こそ、作者の

Hosei University Repository

手による一回だけの作業によって編まれるものである。しかし、そのことと、そのテクストが意味を発動することとは分けて考えるべきものなのである。

作者が参照し、また読者が参照するテクスト全体性は、社会的なものであり、かつ同時に個人的なものである。ここではラングとパロールを説明することがそのまま、テクスト全体性の二面性を明らかとすることになるであろう。ある言語テクストの全体性は、ある通時的経験の共有から成立する言語共同体によって共有される共時的なものであり、テクストの認知のために不可欠な諸規則を含んでいることで、ラングと等しく、そのような規則が特別なテクスト生産において個々に活性化することで、パロールに等しい(注3)。すなわち、テクスト全体性こそがあるテクストの生産を保障するものである一方、テクスト全体性があるテクストを包含することになるその瞬間の営みこそが、新たな言語活動の活性化の個々の現象でもある。このことが示すように、テクスト全体性は、ある言語共同体の成員によって共有される社会的インフラストラクチャーであると同時に、そこに依拠しつつ、新たな個別テクストが個々のテクスト生産によって付加されることで、個別の営みとして再構築されつつ、その再構築がさらに社会的インフラストラクチャーへと供されることになる。

このように考える時に、テクスト全体性についてはまたもう一つの比喩的説明が可能となろう。すなわち、テクスト全体性は巨大なデータベースであり、個々のテクスト生産は、常にそのデータベースとデータ交換を普段に繰り返しながら行われるのであり、生産されつつあるテクストのデータがデータ交換によりその生成プロセスにおいてもデータベースのデータと参照が繰り返され、それが繰り返されることでデータベースそのものも一瞬毎に変容していくことになる。とするならば、テクストが開かれているということは、そのテクストがこのようなデータ交換に対して開かれていることであり、テクストがテク

Hosei University Repository

スト全体性とのデータ交信のための諸特性を有することなのである。

個々のテクストがテクスト全体性との間でデータ交換を行うことが可能であるためには、データが構築されている基礎であるコードが共有されていなければならない。基本のコードを等しく持ち、そのコードに依拠してすべてのデータが構築されているテクストは相互にデータ交換が可能なのであり、そのようなテクストによって構築されるテクスト全体性と個々のテクストはデータ交信が可能であり、個々のテクストの生産されるプロセスでのテクスト全体性の更新が絶えず行われるのである。

文字テクストが作り上げているテクスト全体性は、これまでに行われてきた文字テクストの範疇内でのテクストジャンル分類によって、その構造が、重層的なサブ全体性によって編み上げられており、個々のテクストが参照される時に、どのサブ全体性を対象とするか、また複数のサブ全体性をどう関係付けるか、また最終的に総体としてのテクスト全体性との総合的な対照をいかに進めるか、その個々のプロセスの採用決定によって、テクスト全体性の更新が複雑さと多様性をさらに強めることになる。

これらのことが示すのは、文字テクストが作り出しているテクスト全体性の複雑さと多様性こそが、さらなる差異と対立を持つ文字テクストの生産を可能とし、また促しているのであり、かつその新しいテクストの生産がテクスト全体性の生産力を増強していくということである。つまり、テクスト全体性の豊かさとその全体性の複雑さ、多様さが個々の新たなテクスト生産の源であり、逆に新たな豊富なテクスト生産がテクスト全体性を常に豊かにしていくと言える。

であるからには、文字テクストという表象形態がさらに他のテクスト表象形態と連結する場合には、何が起こるのであろうか。

Hosei University Repository

## 3．表象形態内・間テクスト性と超表象形態・間テクスト性

前節では、文字テクストを例に取りながら、一つのテクスト表象形態における個々のテクスト生成とテクスト全体性の相互依存的テクスト生産について考察した。しかし、その際に論じたことが文字テクストについてのみ当てはまるという限定はどこにも存在しない。おおよそテクストが、前節で述べた相互依存の記号としてその意味を獲得する時に、そのテクストは、有効な差異と対立をテクスト間で相互に持ち合い、それによって組み上げられる記号体系の中で作用しあうのであるから、そのようなテクストが言語によって組成しているだけでなく、他の表出手段によっていても、記号の働きは何らの違いなく普遍的に発動する。すなわち、文字テクストがその中の個々の文字の有する記号の意味作用によって生成するテクストであるように、たとえば、音楽テクストは、その中の個々の聴覚情報である音が記号として有する記号の意味作用によって個々の音楽テクストとして成立するのであるし、絵画テクストと写真テクストでは視覚情報による記号の意味作用、映画などの動画および演劇などの舞台上での身体表現は聴覚情報と視覚情報による記号の意味作用、そのようにしてそれらすべてがそれぞれの記号の意味作用によってテクストとして成立する。

当然のことながら、ここに列挙した文字テクスト、音楽テクスト、絵画テクスト、写真テクスト、動画テクスト、身体表現テクストは、記号作用の基本は同じであるが、それぞれが独自の記号体系を保持し、だからこそそれぞれが独立した芸術表象形態として営まれているのである。

次に、ヤコブソンの翻訳の定義を想起してみると、彼の下した翻訳の定義では、表象形態を超えてテクスト転換を行うことが翻訳行為の第三の行為として挙げられている(注4)。すなわち、文学小説というジャンルに属する言語テクストとして一度生産されたテクストが映画

Hosei University Repository

テクストへと変換されることは、翻訳なのである。言語テクストは言語記号によって成立しているテクストであり、映画は映画記号によって成立するテクストであるから、それぞれ依拠する記号体系が異なるのであって、それがゆえに、この合い異なる記号体系を相互に関係付ける作業を介することで初めて、言語テクストから映画テクストへの転換が可能となる。言語テクストを作っている言語記号の体系は、その中の個々の言語記号が言語記号体系の中でのみ獲得している差異と対立によって、その記号毎のシニフィアン・シニフィエを措定することで成り立っており、同様に、映画テクストも映画記号の記号体系によって作られており、映画記号体系の中の映画記号がまさに映画記号体系の中でのみ差異と対立を獲得することでその記号毎のシニフィアン・シニフィエが与えられて成り立つものである。であるから、ここで行われる翻訳が、そのような二つの合い異なる記号体系を結ぶのである。このように捉える翻訳は、言語テクストと他のもう一つ別のテクストという二項間を結ぶことだけを指すのではないことは言うまでもない。

では、そのような記号体系を超えてテクストを結びあわせることを可能とする翻訳とは、実際には何をどう行うことなのであろうか。それについてさらに考察を進めていこう。

## 4．超表象形態・間テクスト性

そこで提起しておきたいことは、このような翻訳によって成立するのが、超表象形態・間テクスト性であるということだ。

テクストはすべて記号によって編み上げられているものであり、テクストを最初に編み上げるテクスト製作者が依拠する記号体系を共有する受容者が、そのテクストを編み上げている記号をその記号の記号

Hosei University Repository

体系に対して参照することで、そのテクストを構築する記号の一つ一つの意味とその編み上げによるテクスト一つ一つの意味が受容者によって発動されることはすでに述べてきた。したがって、テクストが編み上げられ、そのテクストが流通させられ、受容者がそのテクストを入手して、記号の参照を行うことによって、受容者によるそのテクストの意味作用が生起させられる。そこで、稼動しているのは記号体系の中での記号の意味獲得と伝達の仕組みなのであり、モノとして手渡されているテクストがどんなモノであろうとも、テクストの意味の生起はテクストを編み上げている記号の意味作用によるのである。しかしながら、記号の参照を行う行為者は、テクストの最初の編み上げを行う製作者であり、そのテクストを入手し、そのテクストの編み目をたどり、記号を記号体系の中に配置する受容者なのであって、そのどちらにおいても、記号が記号体系という一つの記号全体性の中で作用するように、テクストも一つのテクスト全体性の中で作用しているのだということを、この章の最初に確認してきた。そして、テクスト全体性が記号体系と同じく共有されるものであると同時に、きわめて個人的なものであることも確認してきた。その確認に基づいて、ここで追加することになる考え方が、超表象形態・間テクスト性なのである。

テクストの生成に際して、その行為者が第一次製作者＝作者であれ、第二次製作者＝受容者であれ、その行為者は、一つだけの小さく弁別された記号体系を排他的に作用させているのではない。テクストを編み上げる記号の採択が、一つ一つの記号毎に参照と選択と決定の頻繁な反復であることはすでに述べてきたが、そして、一つの表象形態に属するテクストの生成に際しても、その表象形態が、サブ表象形態によって重層化されているために、そのテクストが帰属する極めて特定された表象形態内の記号参照だけでは上記の頻繁な反復が完結し得ないのであって、常に重層化された記号参照が前提となっているのであ

Hosei University Repository

ることも、すでに述べてきたことだ。そこでさらに我々が気付くことは、間テクスト性が表象形態を超えてすでに発動しており、表象形態を超える間テクスト性の発動によって、複雑化し、多様化したテクストの意味生産が可能となったことなのである。

テクスト生成の行為者が、共有されるテクスト全体性との記号参照を反復する際に、固有化されたテクスト全体性を構築し、その固有化されたテクスト全体性との応答によって、固有化された意味生産を行うが、その固有化されたテクスト全体性はテクストの他者への手渡しによって、再び共有されたテクスト全体性に回収され、そこからまた次のサイクルの反復が繰り返される。ここで強調するべきことは、固有化されるテクスト全体性は、行為者の記号参照行為によってその固有化が起こるのであり、その際に、その行為者が参照する記号体系も、行為者の意味生産においては複数の記号体系が行為者の任意的選択による参照に付されると共に共有と固有の過程を反復していることだ。

恣意性は記号の意味付与における重要な概念であるが、記号の体系性が成立することが記号の意味の前提であるので、恣意性とは、決して記号使用者毎のすべての拘束から自由な意味付与を指しているのではないことはここで言明する必要はない。しかし、テクストの意味生成の行為者が、共有されるテクスト全体性に依拠しつつも、複数のサブ・テクスト記号体系を参照することで固有のテクスト全体性を構築する際に、そこで参照する複数のサブ・テクスト記号体系を選ぶことは、前述した翻訳の可能性がもたらす制限の中で行われるのであり、その点に配慮して複数の記号体系の任意的選択参照ということになる。また、任意的選択参照は、参照の構造化の範囲で行われるのであり、参照の行為者は、参照の構造化によって強制される選択的参照を行うのであって、ここで言う任意的選択とは意味発動と意味交換のための公共性を築きつつ行われるものであるのだ。しかしながら、ここで言う公共性とは、自らの意思に反して強いられる公共性ではなく、

Hosei University Repository

自らが参照行為を行うことで自らの意思によって求めて更新しつつ築いていく公共性である。すなわち、それはテクスト流通への自らの関与によってその生起に自ら関与する公共性である。

## 5．間主観性と公共性と超表象形態・間テクスト性

テクストの意味生成における公共性とは、記号の恣意性と不可分な概念であり、間記号性、間テクスト性を発動させる前提となるものである。記号と記号が関係を結び、記号としてのテクストと記号としてのテクストが関係を結ぶのは、公共性によって築かれた公共空間においてなのであり、その公共空間の中で記号・テクストが行き交い、出会い、関係を結び、その公共空間の中で記号・テクストの意味が生成され、交換され、成長するのである。

そこで考えることになるのは、公共空間として現代の＞都市空間＜であるが、それは、記号が交換される＞公共空間＜であり、そこに様々な形態による記号が配置されることによって、記号の編み目が編まれ、その公共空間の中の編み目の上での記号の相互対照によって、相互対照を行う行為者が獲得する記号の意味がその公共空間に成立する。記号の意味の仕組みが認識されることによって所与の意味という呪縛からの自由を獲得することのできた後の都市空間は、逆に、意味の非在という不安にさらされる場であり、意味の非在の真空に、畢竟非実体的な意味でしかないのであれ、意味を充填することで、意味の非在の不安を克服することが必要となったわけだが、その結果、真空の公共空間を埋め尽くすために、空虚な記号のシニフィアンを大量使用することで、空虚なシニフィエの乱造を行うことになった。しかし、記号の生産なくしては意味の非在を埋めることの可能性はありえないのであるから、そのためには、今一度記号の意味の生成に自覚的になるこ

Hosei University Repository

と、すなわち、記号を使用する過程に自覚的になることを求める希求が広範囲に発生するのであり、記号の意味の非実体的であることを意識化した上での記号交換が、記号交換の当事者の自覚として共有されることになる。同じ現象が、〈都市の公共空間〉だけでなく、〈意味交換の公共空間〉でも生じているのであり、意味の生成にかかわる過程とその意識化が、記号の小さな過程から、テクストの大きな交換過程に至るまで繰り返されることがここまで及ぶことになる。

さて、ここで改めて公共性について定義する考察を始めなおすことにしたい。そこで、まず間主観性による自己同一性の確立のことに言及しなければならない。なぜなら、自己の意識は、それが他の意識の存在をそれとして同定するときにのみ、またそう同定しうる程度に応じてのみ、自らに気づくようになるのであり、意識は、それ自身の特性を、世界に関する他のパースペクティヴの間にあるひとつのパースペクティヴとして同定し、認めることによって、自らを脱中心化しなければならないからである(注5)。それがゆえに、その自分自身の自己意識は、記号の意味作用による意味生成と意味交換を通して他者の自己意識を発見し、認識し、その動きを通してまさに自分自身の自己意識を認識し、確立していくことができる。記号の意味生成においては、一人の記号発信者・受容者が、その記号の意味付与への独立的特権性を保持することはありえないのであり、意味交換の公共空間において、公共の場における自己と他者の自己存在を自己と他者の双方に対して気づかせ、認識させ、認定させること、そして記号の意味生成の生起と自己と他者との相互的関係性の構築とを同時的に遂行するのである。公共性についての考察においては、自らの脱中心化ということがここで重要な要素となるのであるが、それは、何より、自らの自己の覚醒が自らの相対化によってなされるのであり、そのようにして覚醒する自己は、自己と他者のどちらをも、どちらがどちらに対してであれ、隷属させることを、その覚醒の過程そのものによって、その

Hosei University Repository

覚醒の最初から回避しているからだ。自己意識とは、間主観的現象であり、関係する複数の意識によって相互承認されることで、自己の認識が自己と他者において認証されることができ、それぞれの自己に存在が可能となるものである。

自分自身による自己認識と他者から寄せられる自己認識とは、どちらも、主体による客体への視線によって成立するものであり、その際に、その視線が成立することによって、視線を発する主体も、視線の対象となる客体も、その視線を成立させる要件として、その存在が確かなものとなるのであるから、見つめることと見つめられることとは、同義的に重要性を持つのである。すなわち、意味を発することと意味を受容することは、この点において、弁別しがたい、自己同一性の成立のための動作であるのだ。であるから、テクストの生成と交換が、テクストそのものの成立の問題であるだけでなく、テクストを生起せしめる自己の存在にかかわる問題であると言うことができる。

それは、自画像を画く・見る、他者の図像を画く・見るというテクスト生成と交換においても、繰り返されるプロセスと原理なのであって、つまり、他者のポートレートであれ、自身のセルフポートレートであれ、ポートレートを作画する・受容することを通して、他者の視線によって、自己を認識する主体である自己が視線の対象である客体として確立するのであり、自己にのみ向かう無限後退する自己中心の視線ではなく、また無限に拡散する他者に向かう視線ではなく、画くために・画かれるために・受容するために交錯する視線によって、主体と客体の同時的で相互的な成立が可能となるのであり、間主観的な自己認識の成立の場としてポートレートが機能するのである。他者を見つめることで、そこに見つめられる他者が成立し、その他者を見つめる自己がまた同時に成立する。他者から見つめられることで、他者に見つめられる客体としての自己が成立し、見つめさせる主体としての自己が同時に成立する。ここにおいてもまた、テクストの意味生成

Hosei University Repository

のプロセスが発動しているのである。肖像画とは、それを描く画家と、描かれる人物とが、見つめあうことで成立するものであり、描く我と描かれる我が相互に自者であり他者であることが同時に成立することを根拠として要請するものである。描く我は、描かれる我を自立する他者であると認証することで、そのような描かれる者を描く我の自立性の担保となし、描かれる我は、描く我を自立する他者と認証することで、その描く我の視線を聖別するのである。見る主体は見られる客体との間で、その見る・見られる行いと、そして主体・客体の存在を相互に交換することを認め合う個であることを互いに知っていることの間主観性が、ここにおける前提であるのだ(注6)。

## 6．結び
### ――自己と他者の確立の原理としてのテクスト生成――

言語テクストであれ、視覚テクストであれ、テクストを生成することと交換することが、分けられない一つの根源的動作であり、テクストを生成・交換することで、自己と他者とが同時にその存在を確立するという原理について述べてきたのであるが、この小論で確認してきたように、およそテクストというものの持つ根源的機能が、すべてのテクスト発動の場において、その当事者のすべてに対して作用し、テクストの意味が成立することで、それに関与する行為者の自己認識が能動的に成立するのである。そのプロセスが有効に機能するためには、成立すべき自分自身の自己と、こちらからとそちらからの双方向において同格として認め合う他者の自己が必要なのであり、その自分自身の自己と他者の自己との間において、テクスト交換が行われることで、すなわち、意味発動の要求と意味発動のありようについての相互的同意によって支えられたテクスト生成とテクスト交換の公共性を互いに

Hosei University Repository

成立させる同時的能動性によって、テクストの意味と自己の存在とが確認されるのである。

さらに、テクスト交換の意味生成が通時的に今までにない重要性を帯びていることについてさらに付言することを、締めくくりとしてもう一度繰り返すならば、次のことが言えるのである。

使用価値だけで事物の価値が決定付けられるのであれば、その前提として、事物の所有者は、自分の必要を満たすために不可欠な事物のすべてを所有しなければならない。しかしながら、間主観性によって人の自己同定が成立するのであるから、個人が他の個人と明確に区別されることが、その人によって、自分自身という個人性の成立と、かつ同時に、間主観性を取り結ぶ相手である個人を他者として同定することで成立するその他者として個人性の成立によって、常に保証されねばならない。この過程は相互的であるので、片側の個人だけが、自分と他者についての弁別を成立させ、そのもう一方の個人がそれを成立させないということはありえない、あるいは、その相互性を成立させえない他者は、この過程を満たす相手としての他者ではなく、その存在の相互的保証を成立させないことで互いの自己の存在を脅かす者であり、それは他者ですらない。戻って、間主観性を相互的に成立させる相互的存在の個人は、事物の使用価値がそれぞれに充足している閉鎖的使用状況にあるのであれば、意味の交換を最初から必要としないはずなのであるから、実は、間主観性成立のための意味交換の公共性を互いに相手に対して欠くことになり、そもそも間主観性を現前させることが出来ないのであり、このような個人の成立を可能とする資格のない者となるのであるから、したがって、この過程の成立のための要件として、使用価値でのみ価値を専有するのではないことが求められるのである。すなわち、交換価値の存在が、間主観性による個人の自己同一性の成立の前提となるのである。ハーバーマスの指摘する資本主義の矛盾によれば、交換価値の全き追求によって、利潤率が最

Hosei University Repository

後には下がることとなり、利潤の重積を目的とする資本主義が、その目的のためにより専心するほどに、その目的を破壊することが招来されてしまう結果となる(注7)。すなわち、資本主義が元来内包する矛盾が露呈する段階となるならば、その段階においては、交換価値の追求が全き善ではなくなるのであり、その段階において、さらに崩壊をきたすことになるのが、間主観性の確からしさである。ここにおいて、要因と結果の悪しき循環が生ずることになるのであるが、すなわち、交換価値のシステムは、経済原理であるだけでなく、意味生成のシステムとして、個人の自己同一性の哲学原理でもあり、交換価値の全き追求が、経済原理として全き善でなくなるということは、意味交換の成立に依拠する自己同一性の哲学原理の実現もその確からしさを失い、そのことが相互に干渉しあって、原理の崩壊が原因と結果の連鎖を呼び合ってしまうのである。しかし、それを逆にまた考えてみれば、意味交換の自己同一性生成の哲学原理に再度確からしさを取り戻すことが出来れば、そこからまた、交換価値の追求の善であることが回復できることになる。すなわち、今、世界的に、文化の前景化として起きている現象は、グローバル資本主義の矛盾段階において、資本主義の交換価値追求の善性が失われている時に、それが同時に意味交換の追求の善性の危機であるとしてとらえ、意味交換の追求の善性の回復を成就することによって、交換価値の経済原理を回復しようとする現象なのである(注8)。そして、そのことによって、原因と結果の悪しき循環が転換し、間主観性が回復されて、他者が間テクスト性の意味交換の適格用件を有する他者として互いに認証されることとなり、それぞれの存在が自分自身にとって、また他者として相互に成立することが回復されるのである。であるからこそ、ここにおいて、間テクスト性に依拠する意味生成原理の基本的重要性が確認できるのである。

Hosei University Repository

## 注

1 拙論「作品と受容者のインターテクスチュアリティ」法政大学国際文化学部紀要『異文化』論文編第7号、2006年
2 ロバート・C・ホルブ『〔空白〕を読む－受容理論の現在』鈴木聡訳、勁草書房、1986年、232～238ページ
3 グレアム・グレン『間テクスト性－文学・文化研究の新展開』森田孟訳、研究社、2002年、264ページ
4 ロマン・ヤコブソン「翻訳の言語学的側面について」『一般言語学』川本茂雄監訳、みすず書房、1973年、56～64ページ
5 ニック・クロスリー『間主観性と公共性－社会生成の現場』西原和久訳、新泉社、2003年、45ページ
6 ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛－ルネサンス期フランドルの肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年、300～303ページ
7 Habermas,Jurgen:Legitimation Crisis,Cambridge,Polity,1988, p75
8 スラヴォイ・ジジェク『厄介なる主体1－政治的存在論の空虚な中心』鈴木俊弘・増田久美子訳、青土社、2005年、384～394ページ